P-290

当院における最近３年間の血液培養提出状況と結果に関する検討

鹿児島赤十字病院　薬剤部

○若松健太郎、内村　仁美、新井　　裕、岩下　健一、永瀬ゆり子、松田　剛正

【緒言】血液培養は緊急性の高い検査であり、敗血症が疑われる患者の診断と治療に大きく影響する重要な検査である。コンタミネーションを除き血液から原因微生物が検出された場合、抗菌化学療法を最適化できるため、血液培養を行う臨床的意義は極めて大きい。今回、2009年から2011年に当院で実施された血液培養について、同定菌種、培養陽性率、血液培養2セット実施率について年次別に検討した。その結果をJANISサーベイランスの年報と比較し、若干の知見を得たので報告する。

【方法】2009年1月1日から2011年12月31日までの期間に提出された入院患者の血液培養検体を対象とした。血液培養検体の集計は、JANISサーベイランスの集計方法に従い、30日以内に同一患者から同一菌が複数回検出された場合、重複処理を行なった。

【結果】血液培養検体数は、2009年55件、2010年167件、2011年127件であり、年次によるばらつきが大きかった。当院の主要分離菌5菌種の割合は、血液培養検体の81.1％を占め、JANISサーベイランスの主要分離菌5菌種の割合49.3％と比較し分離割合が高かった。当院の血液培養陽性率は15.5％であり、JANISサーベイランスの17.2％と同程度であった。血液培養2セットの実施割合は22.1％であった。

【考察】当院の主要分離菌5菌種は、JANISサーベイランスの主要分離菌5菌種と同様の結果が得られたが、JANISサーベイランスと比較し、*Escherichia coli*　の分離割合が高かった。当院の患者背景は血液培養からの分離菌種に密接に関係していると考えられる。最近3年間における血液培養サーベイランスから、当院における血液培養のベースラインをとらえることができた。今後もサーベイランス活動を継続して行い、主要分離菌の検出状況の動向を把握し、当院の感染制御に貢献していきたいと考える。

P-291

被災地における初期の他施設内トリアージエリアでの活動

飯山赤十字病院　薬剤部[1)]、同事務部[2)]、同医療技術部[3)]、同看護部[4)]、同脳外科[5)]

○滝澤　康志[1)]、宮崎　　修[2)]、新免　　悟[2)]、小林　隆司[2)]、石川　敬之[2)]、鈴木　伸明[3)]、岡村　悦子[4)]、小出貴美江[4)]、泉　　妙子[4)]、原田　　博[5)]

【目的】2011年3月11日に東日本大震災が発生し、多くの薬剤師も救護班に配属され活動をおこなった。一部の薬剤師はイエローエリアに入り活動をおこなった。イエローエリアで薬剤師が活動をおこなう際の介入の仕方や必要性を明らかにすることを目的とした。

【方法】薬剤師が救護班に配属されてイエローエリアで活動をおこなった飯山赤十字病院の救護班のスタッフ（医師、看護師、主事）に対して薬剤師の活動についてのアンケートをおこなった。無記名にて、職種、薬剤師がいて評価できた点、改善が望まれる点などの項目について調査した。アンケートは各施設にメールにて配付し回収した。

【結果】9名から回答が得られた（回収率100％）。医師1名、看護師3名、主事5名であった。全てのスタッフが救護班に薬剤師が参加した方がいいと回答された。薬剤師がいて評価できた点としては、使用したい医薬品がわからない時に相談ができて良かった、看護師が看護に専念できた、被災者からの薬の相談に対して薬剤師が直接相談していただいて良かった等であった。改善が望まれる点では、エリア内での薬剤師の立場の確立が必要、薬剤の混注時に薬剤師と看護師でダブルチェックをおこなえる様な体性作りが必要、各エリアに最低一人は薬剤師の配置が必要等であった。

【考察】活動をおこなった救護班の全てのスタッフは薬剤師の介入が必要と回答されていた。これは、薬剤師がいる事で評価できた点にあるように医薬品の適正使用に貢献でき、各職種の業務の軽減にもつながった事が示唆された。薬剤師は救護班に積極的に参加し医薬品の適正使用に関与することが大切であると考えられた。

P-292

埼玉県北部薬薬連携協議会の設立と活動報告

深谷赤十字病院　薬剤部[1)]、
深谷赤十字病院　地域医療連携課[2)]

○須賀　宏之[1)]、内田　宜伯[1)]、木村　　修[2)]、麻生　一郎[1)]

深谷赤十字病院では、平成23年2月に地域薬剤師会と「埼玉県北部薬薬連携協議会」を組織した。きっかけは当院に入院してくる患者の持参薬鑑別時の煩雑さからだった。記載方法の差異や記載間違い等が多く見られた。お薬手帳には用法・用量の記載がなく薬品名だけものや処方は後発品名ではあるが記載は先発品名のものまであった。患者の安全を担保するために、地域薬剤師会との検討が必要となった。日本薬剤師会医療事故防止検討会より出された「平成20年度医療安全のための薬局薬剤師と病院（診療所）薬剤師の連携推進事業総括報告書」に記載されている「適切な医療サービスが切れ目なく提供される医療提供体制」を整備し、入院・外来・在宅を通じ、医療の継続性・一貫性を図っていくための薬局薬剤師と病院薬剤師の連携がこれまで以上に求められていた。

埼玉県北部薬薬連携協議会は、埼玉県北部に位置する行田、熊谷、深谷、本庄児玉、寄居、秩父の各薬剤師会とそれらの地域の中核5病院とで組織した。薬局薬剤師と病院薬剤師との相互理解、相互利益、相互尊重を掲げ、患者に対してより良い医療を提供するための意見交換の場とするため、研修会を年1回以上開催することとした。

研修会は第1回『薬薬連携：情報の共有 知りたい情報と伝えられる情報』、第2回『GE薬の採用・選定基準について』が終了している。薬局及び病院薬剤師からの発表、お薬手帳記載に対する弁護士からの回答や関連協会からの発表等も盛り込み、薬局薬剤師と病院薬剤師との情報交換の場として評価されている。平成24年6月には第3回研修会が開催される予定である。

今回、第3回研修会の内容も含め、設立から研修会開催、研修会アンケート結果について報告する。

P-293

がん化学療法レジメン集の使用実態調査に基づく取り組み

広島赤十字・原爆病院　薬剤部

○坂本　健一、関本　恭子、宅江　良隼、上野千奈美、今田　雅子、土井　憲吾、樫本　考司、酒井　洋子、谷口　雅敏

【目的】当院では、がん化学療法レジメン(以下、レジメン)情報の院内共有を目指し、簡略化したレジメン集をPDF形式で院内Web上で公開している。公開開始から約4年経過し、公開率99.3%(285/287)となったので、実態調査・内容の評価を行った。この結果に基づき、より多くのニーズに合致し、使いやすいレジメン集とすることを目的に検討を行った。

【方法】投与スケジュール、投与量、点滴スケジュール、注意事項の4項目構成のレジメン集について2012年3月5日～3月16日の期間、全職員1,037名を対象に、使用頻度、目的、内容に関するアンケート調査を実施し、回答率は67.2%(697/1037)であった。院内化学療法委員会において結果報告、要望の検討等を行った。

【結果】レジメン集公開の認知率は52.8%(368/697)、使用経験があったのは29.8%(208/697)。意見として、「院内Webからのアクセスが悪い」、「使用方法がわからない」、「レジメンが多く目次が見にくい」等があった。内容に追加してほしい点は、「頻度の高い副作用」、「輸液ポンプやルートに関する注意事項」、「未公開レジメンの公開」等があった。検討の結果、アクセス方法の改善、使用方法の講習会実施、薬剤師・看護師共同での内容・様式の検討、診療科別から臓器別管理への移行による重複レジメンの整理に取り組むこととなった。

【考察】調査によりアクセス方法、使用方法の理解不足、レジメン数の多さによる煩雑さなどの問題点、内容・様式の改訂事項が判明し、改善に取り組んだ。総会当日は取り組みの実例を報告する。院内スタッフへの薬物療法に関する情報提供は薬剤師の役割であり、安全で質の高い医療に貢献するには、受け手のニーズを反映した情報提供が重要と考える。